

奈良 勲, 神戸晃男, 山崎俊明, 木林 勉(編集)

理学療法から診る廃用症候群 基礎・予防・介入

評者 伊橋光二

(山形県立保健医療大学)

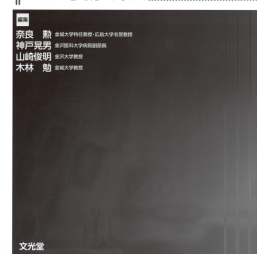
奈良勲氏らによる『理学療法から診る廃用症候群—基礎・予防・介入』が上梓された。理学療法士にとって廃用症候群は古くて新しい課題であり、日々の臨床で常に向き合っている対象である。しかしながら廃用症候群に焦点を絞って捉えた書はこれまでなく、本書が出版された意義は大変大きいと考えられる。

廃用症候群は1964年のHirschbergによる「過度の安静による二次障害」が最も基本的な概念と考えられる。過度の安静によって引き起こされる二次的障害は、「防ぎ得るもの」であり、「防がなければならない」ことを意味している。この代表の一つが褥瘡である。褥瘡は医療チームをあげて防がなければならない二次的合併症であり、「自分の担当患者に褥瘡をつくったら恥だと思え」と学生時代から叩き込まれたものである。生体は重力下で常に運動することで機能を維持することができるのであって、これを最大限に支援していく役割が理学療法士に求められている。

一方、近年、理学療法の対象疾患・障害や対象とする病期が拡大し、これまで「過度の安静」とされてきたものが複合的な要因によることがわかってきた。例えば、本書でも取り上げられているように、心疾患や呼吸器疾患で発生する骨格筋の変化には、低酸素、低栄養、全身の炎症、薬剤の影響などの関与が明らかになっている。これらに過度の安静が加わって筋萎縮を引き起こしており、特に集中治療における重篤な筋力低下(ICU-Acquired Weakness)は理学療法士にとつ

理学療法から診る 廃用症候群

基礎・予防・介入



て大きな課題となっている。このように、廃用症候群に関する最新情報を十分に把握して対応することが重要である。

本書は3つの章で構成され、1章の廃用症候群論における「臨床哲学からみた廃用症候群—心身の老衰などにおける人間の尊厳」では「奈良哲学」と称される氏の深い洞察が示されており、じっくり読み込んでみることを推奨したい。2章は廃用症候群のメカニズムであり、局所性として拘縮、筋萎縮、骨萎縮、軟部組織、褥瘡が取り上げられ、全身性として栄養、摂食機能、代謝機能、口腔機能、姿勢調節について、特徴、発生メカニズム、経過、予防・理学療法などが詳述されている。3章の代表的な疾患に対する各論では、脳卒中、脊髄損傷、高齢下肢切断、心疾患などに加え、neonatal intensive care unit(NICU)や精神疾患なども取り上げられ、幅広い分野をカバーしている。

本書は日々臨床現場で廃用症候群とたたかっている理学療法士に対して、改めて廃用症候群をそのメカニズムから見直す機会と、予防と治療の新たな視点を数多く提供している。ぜひ多くの理学療法士に一読を勧めたい書である。

● B5判・264頁・2色刷

定価：6,480円(本体6,000円)

文光堂刊、2014年